月　刊

Mélange

Vol.138

2018.12.09

詩と評論

「月刊めらんじゅ」138号　目次

詩

2　哲学女子死後八年２・11……岩脇リーベル豊美　03
水滴 ……中嶋康雄　04
静物　I／静物　II ……野口裕　05
Le premier baiser ……にしもとめぐみ　06
夜はしずかにしずかに ……黒田ナオ　07
わななき ……大橋愛由等　08
ことば(2)……月村香　09
ゆび　……秦ひろこ　10
鏡のように ……北岡武司　11
太平洋の蜃気楼 ……冨岡和秀　12
魚影 ……高木敏克　13
打越橋という場所／町なかの川をうたう ……木澤豊　14

連載

神戸詞（うた）あしび 126「明治 150 年―兵庫県と奄美の問いかけ」……大橋愛由等　16

編集部だより★57／よもやあるまいと思ってネット検索してみれば、あった。同窓会がわれわれの学年だけ奇跡的に存在していた。わたしは中学校のみ公立学校に通った。西宮市立甲陵中学校。私立ならともかく公立の中学校はどこでも学校や自治体がバックとなった同窓会組織なんてないだろうと思い込んでいた。それがわれわれの学年の中で酔狂な人物がいて同窓会を立ち上げていたのである。甲陵中学校は、マンモス学校で一学年 12 クラスあった。芋の子洗うがごとくの大人数で、588 人いたそうである。中学二年の時、プレハブ校舎だった。1960 年代後半のあの当時、プレハブ校舎にエアコンなんて設置されているはずがなく、夏はとんでもない炎暑、冬は身を切るような寒さ。若いから耐えることができたのであろう。プレハブ校舎で過ごした一年間は今でも恨みこそすれ、楽しくともなんともなかった。／あまりに人数が多かったので、11 月 17 日にあった同窓会には、絶望的に見知っている人はいないだろうと覚悟していた。わたしは３年９組に在籍していた。たったひとりＩという女性が同じ９組だったが、わたしを覚えていないという。わたしはなんとなく覚えていた。まあこんなものだろう。ただ９組を担当していた恩師は私のことをなんとか覚えてくれていて、嬉しかった。当時の学級通信のコピーもいただいた。わたしはこの公立中学校を卒業して神戸に転居して、さらに大学は京都だったので、西宮という土地と縁が切れてしまった。まだ私立小学校の縁の方が濃く、いまでも永く続いている。同窓会は、ネット検索して参加したわけだが、わたしにとってこの甲陵中学校の三年間は良い想い出がほとんどなく、暗黒時代だと思い込んでいる。だから同窓会に出席するために、自分の思い込みを検証しリセットしたかったのである。★第 138 回「Mélange」読書会は詩人の中堂けいこさんに「記号論」について語ってもらった。９月に台風接近で休会になっていたものを、例年なら開催しない 12 月に、例会をすることにしたのだった。（大橋愛由等記）／表紙の写真は徳之島天城町にある西郷隆盛が徳之島に滞在した家屋があった地に建立された案内板と石碑（撮影・大橋）

◆2　哲学女子死後八年２・11

岩脇リーベル豊美

痛むのはあなたがとっくの昔に死んでいたという事実ではなく、国際電話するから待っていてねと連絡したときには待っていてくれたのに、Eメールで混み入った話をしてから、また電話かけますと伝えた直後には、もう「おかけになった電話番号は…」に切り替わっていたことです。それは鬱病患者特有の他者を思い遣れずに率直すぎる質問を他意もなくぶつけてくることに対しての、私の非難めいた、むしろ挑戦的なメール返信直後の西暦２０１１年２月11日が死亡日だということを知ってしまったということです。私にも墓場にしか持っていけないことがありますし、持ってゆきますのでしっかりした紙袋とタクシーは必要でしたが、あなたが逝ってしまったのでもうその必要もなくなりました。あなたは本当に墓場まで持って行ってくれました。そんな意味でも忌憚なき御指摘御教示いただける無二の哲学仲間でした。お互い大変プライヴェートなことですので詳しい内容は書けませんが、自分のことを棚に上げてという辛辣な感慨で書いた返信には、返答に困る、否、悪意に近くないでもないという気持ちのほうが強く表れたのでしょう。あなたはそれをまともに受けて、こちらの内面も窺い知るすべはなかったのです。

離婚を成就しこの土地を離れて超越的カント的に自由になったあなたは、セクハラの罠に取り込まれたあとリストカットを繰り返しながら、それでも天職に招聘されて再構築しはじめかけた時のこと。科研申請のアブストラクトを、お名前は失念しましたがもうひとりの日本人女性と書きました。

あなたの「人はなぜ他殺するのか」というカント的論文は非常に高い評価を受けていました、だから死因は自殺だったと確信しています。私のテーマは今は既に自分の中で風化しているような無国籍についてだったと思います。まだプロジェクトが少なくとも三つありますが完成させます。

ＰＣが何度も壊れているのでもはや正確な時間はわかりませんが、あの時の電話での話し方は普通ではありませんでした。これほどまでも長く誰からも訃報が届かなかったということは、今さら自殺か他殺かと勘繰ることなど少しも意味を持ちませんが、あなたの死が自然死ではなかったということです。

あなたと私をつなぐ第三者もいなかったということです。あったのはあなたと同窓の帝大のフランス文学者だけです。大学新聞ウェブサイトのお悔やみもそうでしょう。インターネット上でたどり着いただけなので、いつもプリントアウトした詩や論文を空輸してくれた頃なら、今も知らずに過ごしていたでしょう。

帰国のたびに電話をかけましたが、自己破産申請後は、クレジットカード請求先からの電話を回避するために番号を変えたものだと思っていました。エルメスの何十万もする赤いドレスを購入したと伺ったとき、私はエルメスに関してはHirisという香水をプレゼントされたこと以外は縁がありませんと言いましたが、それはあなたにとってことのほか衝撃的で、その羨ましがり様（語用は適切ではないしょうか）が尋常ではなく、香水自体にではもちろんなくプレゼントをしてくれる人がいるということが、それが配偶者だとは言っていませんでしたが、あなたにはもはや想像できないくらい孤独だったのだと思います。私には赤いエルメスのドレスを着る機会の想像力のほうが欠落していました。

あれから何度もメールをしましたし、きっとそれはサーバーの深淵に潜りこんでしまったわけではないと思うのです、肉親の方はパスワードを読み取りきっと死因がわかっているはずです。

あなたには、絶縁状態にはあったけれどお母様も弟君も、溺愛していたパグ犬の福ちゃんもいたはずです。多くの優秀な学生もいたはずです。娘はあなたの動物園近くのマンションも池で足漕ぎボートを漕いだことも覚えています。お寿司とピザのデリヴァリーも嬉しくて、食べ尽してしまいました。

ご招待いただいた、足マッサージの先生もあなたが異常であることに気づいているようでした。あなたは彼が私と同じ寅年獅子座生まれであることに運命を感じていました。ある学会でお会いしたあなたの昔の恋人は知らないと顔をそむけましたが、あなたは懐かしそうだったよという報告を心待ちにしていましたし、私もそのように伝えました。

また離婚したいと思っていてもできない女友達を見下して、私は彼女が欲しいものをすべて持っているといったことがありましたが、持ちたくないものもすべて持っていったのでしょうか。

それでもそういう死に方はカッコ佳過ぎます、というかカッコ悪すぎます。あなたは私の記憶以外には居場所がなくなってしまいました。東日本大震災がまだこの名を持っていなかった時に、きっとあなたなら詩を書けないほどに衝撃を受けていると思い、いくつか連絡を入れましたが、その苦しみを味わうことなく亡くなっていてよかったです。

フェリチタさん、最後だったと思われる詩を読みますが、それが真実だとわかったところでどうということもないでしょう。でも真実とは気持ちのよいものです。あなたが痛むところが痛いのですから。切り取られたところが痛むのですから。あなたは既に赤い喪服を脱ぎ捨てました、偽名フェリチタさん。

◆水滴

中嶋康雄

水滴が落ちている
見上げている
しわくちゃになって
しわくちゃになって見上げている
もうどこにも行かない
もうどこにも行けない
水滴は毒かもしれない
水滴は悪かもしれない
水滴はとがっているかもしれない
ねばついていれば
怪我をしないですむだろう
ここでどうしてやりすごすのか
鈍行電車でやって来て
立ち止まっている
駅から人が逃げている
駅が人を食べている
虹がいくつも出ている空を
不吉だと思い

不吉だと言い
見上げている
車体が自損事故で凹んでいる
水滴が歪みながら
虹を映している
甲羅の潰れた亀が
漏れたオイルの上の虹を舐めている
盗んだお総菜の
ビニールパックが水滴を浮かべ
水滴がいつも顔に落ちているんです
気になって気になって
なんにも考えられないんです
頭の中の波紋の波紋で
なんにも考えられないんです
水滴が落ちている
風呂から上がり体を拭き終わっても
水滴が落ちている
気になって気になって仕方がないんです
ドアに鍵をかけたのか
かけ忘れたのか
水滴がいつまでも後ろ髪を引くんです
ドアのノブ
ドアのドアのノブ
またぎゅっぎゅっと確かめる

何度も何度も
繰り返し繰り返し
手の皮がおかしくなるまで
繰り返し繰り返し
数十秒後にはまた不安になる
また戻るんです
また戻り戻るんです
水滴が落ちている
頭の中の
絡まり合った
どこから落ちてくるのだろう
いつまで落ちてくるのだろう
いつになったらかわくだろう
いつになったら
水滴がゆがんで揺れ
百日紅の花に
マルハナバチがやって来る
飛びながら
空中で
止まっている
虫にしては
その顔が大きすぎる
どんな表情もない
その顔が

◆静物 I

野口裕

針金が輪を作り中空にある
貼ってあった皮はすでに破けている
支えている台座も針金からできて
細い支柱が五本並び
これも針金

五つの支柱と向かい
それがなければ中空の輪が傾くはずの
もう一つの針金は
破れた皮を振り回す途中で
止まったかのように
立ち尽くす

対岸にある灯台が
光を振りまいてくれないかのように
十センチに満たない崖が
十メートルの滑落死を誘うかのように
静かに埃をかむり

オブジェの作家は
先ごろ鬼籍に入った

◆静物 II

野口裕

板にざらりと塗った茶色の絵の具に
白い窓が開き
扉と思える描線が
奥へと伸びる

だが奥へ向かう視線を
遮断するかのように
窓に足をかけて
侵入する黒い影が描かれ
対応して板の下部も
黒く塗られている

よく見ると
窓枠も扉の描線も黒で
どの黒も絵の具の
基底を成していると分かる

そうだったのかと
死んだやつのことをちらりと考え
作家との対話はこれから始まる

◆ Le premier baiser

にしもとめぐみ

embrasserと
embarrasserはよく似ている

あなたからのembrasser に
私はembarrassé

彼の国の人は言葉にまで
恋愛大国なのだろうか

我が国では「口吸い」と言った
キスと言う言葉が入ってきたのは明治以後と言う

突然のキスに困惑する
embarrassé

パリでは街頭で気軽にキスをする　親しい愛情表現だ

すき　すき　すき　すき
キス　キス　キス　キス

我が国も活用するではないか

※Le premie embrasser 初めてのキス
※embrasser　　キスする
※embarrassé　　困惑させる

◆ 夜はしずかにしずかに

黒田ナオ

眠りたい
眠りたくない
誰もいない庭の方から
小さな声が聞こえてくる

さっきのことを
思い出したら
なんだか眠れなくなってしまったの

豆電球の下で
身籠って
廊下の隅で
こっそり何かを産んでいた

夜のうちに生まれたものたちが
台所に置かれた葱や牛蒡
半分に切っておいた南瓜の陰で
ぬしぬしと食べている

できない
わたしにはまだ
何もできないのよ

どうすればいいのかも
よくわからないし

泡のように湧き上がってくる
独り言にまみれて
ぬしぬしと食べている

◆わななき

大橋愛由等

草叢の三つの眼球はさよならを言わない

（閉まらない引き戸をギイとあけるとそこは異郷であった。半世紀前に棲んでいたはずが、誰もボクのことをしらず、知己も見当たらず、記憶に残っていた柱と壁まで声を揃えて「オマエハダレ？」と云う。異郷が薄ら笑いを浮かべて「これはどうだ」と差し出した枯葉は葉脈が不規則に並んで〈非〉と読めるので、その枯葉を桜の古木に向けてみると「それはわたしのセレナーデではない」とにべなく遮った。アメリカザリガニがかつてひゅいひゅい跋扈していた水路に歩いていく途中、通り過ぎる住宅街の表札たちがなにやらボクに喋りかけようとしているのだが、異郷の言葉なのでもごもごしていると、ボクと歩いていた異郷が「そうかそうか」となんども頷き、表札たちに応答している。水路に到着したとき「ユキヒコは笑いながら上海で死んだ」と異郷がぽつりとボクに伝えるのだか、アメリカザリガニを捜しているボクの耳には届かない。腐葉土を踏みながら刈田の向こうにあるゴンゲン山は林相が変わり鳥たち風たちの名辞が変わり、ボクに関心を示さない。異郷はゴンゲン山の中腹に指をさしながら「ここは刻印し踏みつづけなければ意味が閉じる」とボクの肩に右手を乗せていう。異郷はこの異郷に棲んでいるのだろうか。それともボクと同じく閉まらない引き戸をあけてやってきたのか。異郷の結ぼれを亡失してしまったボクはボクを知っている者とモノなんていないことを覚知するため異郷にやってきたのか。ゴンゲン山を背にしてボクと異郷は歩行し「かなしみがひとつふえたかい？」とどちらがどちらへ語りかけたのか覚えてはいないのだ。

◆ことば (2)

月村香

拳銃の弾で人を殺したことのある人は笑わなくなるというわたしはことばで人を撃ちたいわたしの神経が乱れているときにわたしのそのdrôleな顔を見て笑わないでほしいそして苦しみの中にいるときもわたしの心の奥底でわたしはわたしを笑っていてあげたいきれいにお化粧した三歳の娘が七五三で泣きやまないわたしは顔を娘よりくしゃくしゃにして娘に微笑みかける決して胸を一撃はしないであろうだが君まさか会うと思っていなかった人に会いしかも笑いかけられたらわたしはその人を危うく殺しかねなかったろうまさか出会うと思っていなかっことばに足をすくわれたらわたしは生きていけないだろうそして弾丸は万年筆のカートリッジに似ていないか？ それをポケットの手に一発持つのだ／いざというときのために！ わたしは疲れて目をはらしている本当はことばが一年を通してうれしがっているのだわたしは何かを守るためにことばをたぐりよせるものすごく弱くて細く切れそうなことばをさあ少しずつ持ってゆけ

◆ゆび

秦 ひろこ

ゆび
というひらかなもじ
ゆとびのきょくせんが
くるりとまがって
はんなりうごいて
まねいていて

ゆとびの
ひらかなは
やわらかのひふ
なにもまとわぬ
はだかのかたち

めのまえに
十(とお)のゆびさきをもってくれば

ひらかなゆびになってきて
五ほんずつ
ゆびさきどおしすりあって
するするいっしょに
ひらかなのうごき

くちからちいさく
「ゆび」
まるめてひいてこえがでて
うごくくちもとをかんじながら
うえとした　くちびるとじれば
たがいのだんりょく
うえもしたも
まろいひらかなのくちびる

ゆとび
ふたつのかなのまがりようが
視覚の音波でさそってきて
ゆびやくちびる
やわらかにきょうしん
わたしのからだは音叉です

◆鏡のように

北岡武司

おじさん　わたし
どこかに心を置き忘れてきたみたい
喜びも悲しみもありません
笑うことも涙することもないし
父が死んでも悲しくはないのです

あなたがあなたを置き忘れることはない
あなたはその體であり
その心でありその靈なのだ
一(モノ)なるもの(ス)であるあなたが宇宙を映す

景色を映し
星空を映し海を映し　木々の緑を映す
あなたの目のまえで　あなたにおいて
宇宙は自らをくりひろげる

あなたが懐かしがっているのは
生まれるまえにあなたが知っていたもの
不安がっているのは変容の後のあなたの存在
心配することはない

おじさん
でもわたしの心には
おじさんの顔も映りません
声もきこえません

それでもあなたはそこにある
そこにあらわれてある
天に耳を澄ましなさい
星空に目をこらしなさい

みしらぬ波長が
その頬に囁きかけてくるだろう
それをいまも
映しているのです

◆太平洋の蜃気楼

冨岡和秀

離人症の少女が浜辺に一人たたずみながら、健やかな幼児の頃を想い起こしている。少女の心が仮死的な無感動状態なのはなにかの恐れか過剰な不安によるのだろうと「かの者」は推し測る。心の仮死をもたらしているのは枯れた落ち葉の堆積のような傷である。落ち葉にはいまも理由なく流される少女の涙が付着している。枯葉を生きた葉脈のある葉に復活させるには少女と「かの者」の共同作業が必要だろうと優しさと不遜さから「かの者」は思う。「かの者」も自らの心が理由なく震えた頃を想い起こす。遠い日の震えは少女の心の仮死との共振を感ずる要素なのか。遠い日の震えの影はいまも静かに響いている。そう思い做して仮死の心の舟へと夢見の廻廊を渡る。

そうして「かの者」はみずからの夢見によって離人症の少女の心に忍び込む。少女の心的震えは二千メートル地下からこんこんと湧き出る地下水のように止まらない。それはまた水に伴う泡の連なりである。朽ちた葉が泡に取り巻かれると朽ちる性質は消えてゆく。共なる夢見の中で「かの者」と少女の仮死の心は混然一体となり、震えは共振する。泡は朽ちる葉を粉末にする。「かの者」はみずからの朽ちる性質も灰のように粉にする。溶ける。震えののちのカタルシス。

浜辺にたたずむ少女は夢見のさなかにいる。少女は太平洋の中央に浮かぶ孤島の浜辺に打ち寄せる波に足を洗われている。打ち寄せるさざ波は少女には激浪に感じられる。その夢見は夥しい不安からの逃亡のためだ。足もとに寄せてはかえす波が呼び覚ます太平洋の蜃気楼。夢見の中で現れる蜃気楼は島の西方遙か数千キロと覚しい洋上に浮かぶ仮想建築のようだ。その中に夢見る心が入り込む。少女と心的波動を合わせる「かの者」の心にも像をとり結ぶ蜃気楼。半透明の外観を備えた仮想の建物は泡の粒子で出来ている。塔を備えた蜃気楼。少女の夢見が生み出す泡の建物。少女は夢見に乗ってみずからをその逃亡先に運び安穏を得ようとする。少女のささくれ立った感情を鎮めるために、蜃気楼は太平洋の西方から仮想の像を運んでくる。仮想の建物を支える柱は半透明の青い水晶柱のようであり、柱に支えられた内部の空間にはいくつかの部屋がほのみえる。「かの者」は少女の夢見に参入して同じ蜃気楼に入る。いくつかの半透明の部屋には静かな音楽が聴こえ、幻想的な壁画が四囲を囲んでいる。壁画の中には顔のない数人が楽団を組んで楽曲を奏しているものもある。ヴィオラとヴァイオリンのような弦楽の楽団が壁画に収まる。

「かの者」は同じ夢見への参入の狭間で瞬間夢を見る。みずからの瞬間夢の中で、「かの者」は裁ち落とされた自身の頭部を両手で持ち、立像のように立ちつくす。たちまち驚愕と共に瞬間夢から目覚めるが、その痕跡には少女の枯葉の堆積のような傷に相い似た傷がほのみえる。「かの者」は呟く。スティグマータか、ギルティか。

少女の心に流れてくる音楽。みずからの夢見の中に「かの者」の夢が参入していると知るとき微風の音が聴こえる。それは子どもの頃に奏した楽曲のように聴こえるが、幻聴のようでもある。だが幻聴を聴いたのではない。少女はかつて理由のない自死未遂をしたことを想い起こす。「あの事柄がいまのわたしの傷の源」。理由のない自死未遂。「かの者」は同じ夢見の中で知る。理由のない傷の深さを。さらには共なる仮死を。「かの者」は夢で仮に死に、少女は理由なき自死未遂で仮死のままに息をする。仮死の様はいまに至るも続いている。共なる仮死の夢見ののち、蜃気楼の中で音楽の流れは速さを増し、夢見の中に音が満ちる。音楽は聖痕（スティグマータ）を表わす曲と覚しい。遙かに遠い蜃気楼の中で奏される音楽は仮に死んだのちに聴く者の音楽。少女の研ぎ澄まされ、ささくれだった感情のみに、遙かな太平洋からの音楽が到来する。半透明の蜃気楼の中に参入する感情を抱いてのみ聴こえる。音が蜃気楼の塔屋に駆け上がり、幻が聴こえるかのようだ。聖痕の音楽。空は青水晶のような色彩を帯び、海は濃く深い群青。少女と「かの者」が同じ夢見にいるからこそ、呼びさまされるスティグマータ。音楽が蜃気楼の中に響く。それとともに「かの者」の有罪性（ギルティ）は消滅する。二人に固有の音楽。高揚する音響が塔屋に駆け上がり蜃気楼の内宮に満ち溢れる。楽団員に顔の表情が立ち現われ奏でる音楽が絶頂に至る時、少女は仮の死から解け、顔から微笑みが止まらず音楽そのものとなる。「かの者」は「かの者」であることから脱し、崇高な感情音楽のままに蜃気楼の内宮と塔のすべてを駆け巡る音符となる。その至高の音楽が共なる夢見の中で二人を包んだ頂きで、音楽は塔屋を抜け、蜃気楼の建物は太平洋の遙か上空に掻き消える。

◆魚影

高木敏克

骨細のロードレーサーが山影からあらわれて
魚の姿勢で道を下る炎天下
アスファルトに魚の骨が映り
道沿いの川はやはり消えていた

彼はどこに消えたのか
海に消えたというのは恐ろしい
空に消えたというのはもっと恐ろしい
あるいは山影は水に浮かんでいるのか

川はどこから消えているのか
アスファルトにペンライトを当てる
細身の水脈調査員の影法師が
寒天質の中に立ち上がるナマコになる

わたしはどこかで切れているのか
三代前からの記憶の流れに耳をすませば
時間は山から谷を下り
ナマコの腸のテグスが魚影を吊るはず

切断面の川の大きな闇だ
切れてちぢこまったややこしい
時間の小さな池が私の家にある
魚影はそこに消えたみたいだ

病気の池には猫がやってくる
ペンライトのお月さんが浮かんでいます
三代続く病気の池というのがこれですか
外科医が抱えてきたのは魚群探知機

先生、冗談はなりませんよ
人生は冗談とも言えますがなにか
魚影が飛んで鱗が光った
猫舌がそれをなめていた

◆打越橋という場所

木澤 豊

ゆび夜明け前に
凍った急坂をおりて
一束の乾麺を買いに出た十一歳の少年は
鉄橋の下のアスファルトに
倒れて凍っている人がいたので
すこしだけ　避けて通った

過ぎ去った鉄の橋上を
かつて通った人たちが
なぜ　見える

餓えや　取り残された悲しみか
落下する十数メートルの
なにもない
かたく　冷たい　肌さわり　か

夜は
ぱんと　乾いた音がひびいた
谷沿いの坂を下りたあたりの
バラックの前で　七輪をあおぎながら
老人はつぶやいた

また　撃ちやがって
進駐軍の酔っ払いだ

　焼けトタンの屋根の穴に　星が光った
雨の日は　莫蓙に黒い雨が降った
焼けた原っぱは
アキノノゲシやテツドウグサなど
ゆれていた

ゴロ石の急坂の途中に　ツバタくんの小屋があり
裏山でかれの父さんが　木にロープを張った
タオレルホウ　ワカルカナ
斧を一発入れると樫の木は
電車道の方へ
倒れた
それから　七十数年

そのころ
夜明けにうどんを買いに行く途中
あの橋から落下した人に
ぶつかったな
冷たい朝だった

橋上から明るい街が見渡せる
ナニモナイというものの手触りが
いまは　ユウレイという名まえで
いく人も　橋を渡っている

ひゅっと霧笛は耳鳴りか
タオレタモノハ　何ダッタノダロ
わたしは　何を　打ち越したか

今朝は寒い

＊打越橋＝横浜市中区にある高さ12・5m、全長38・37m陸橋1928年竣工。下は路面電車が走っていた。

◆町なかの川をうたう

木澤 豊

いくつか　セレナーデの　風が　吹き終わり　古い町の
川筋に　なにか大事なことが　軽く終わり　こころおもたく
おもいが置かれた　ベネチアなんかに縁はないが
うすい花が漂流して

古い大きなマンションの迷路で　だれか待っているような
息が薄い煙になり　あれは
ゆめを迎えに来ている人とは
別人の古い靴らしい

やはり白いノートだ　白いノートに帰って　続かないものな
あしたからの

古風でいい　あの歌い手の
老いとはなにもので　どこから訪れるのか
それで　濁って　さざ波立つ水面で
記憶は　ほっ　ほっと　抜けて行く
白々と

おれの　おれの　夕暮れだ
夜中に　じぶんの草稿を書きながら　白いノートに
天心だね　そうだね

ことばと文字の結び目を見つけた
こぶ　ね
この歳して　ね
夜は来るし　朝は来るだろうし
いつまでか知らない

夜明けじゃなくて
おれの　夕暮れの

神戸詞あしび

127-2018.12.09 大橋愛由等

今年（２０１８年）は明治維新から１５０年目にあたる。ところが東北では「戊辰１５０年」というのだそうだ。このことから「維新」という用語も普遍的なものではなく、恣意性が含まれることが分かる。

「維新勝ち組」である鹿児島（薩摩）、山口（長州）、高知（土佐）、佐賀（肥前）のいわゆる〈薩長土肥〉の後継自治体である四県の知事が集まって、連帯を確認したり、共同イベントを開催したりしている。西国諸藩の武力が明治政府を作ったのだという歴史の記憶を確認したいのだろう。もちろんこうした倒幕勢力の勝ち馬に乗っただけの藩も多かった。最後までどちらかに付くか迷ったあげく鳥羽伏見の戦いの結果を見てあわてて藩内の意見をまとめた加賀藩のような例は特殊ではなかった。

そこで考えた。日本列島にさまざまな「明治１５０年」があるのだということ。「維新」ぱかりではなく、能動的な行為を経ることなく「なしくずしの明治」を迎えた地域も多かったはずだ。

こうして考えるとわたしの住む兵庫県は、誕生の経緯からすると、地政学的な必然から産まれたのではなく、「もっぱら明治政府の中央的・国家的見地によるものであることは言をまたない」（『兵庫県の百年』山川出版社 1989）との分析に従えば、当初から「国策県」であったことがわかる。しかも五つの地域（但馬、丹波、播磨、摂津、淡路）の地域を合体させて今の兵庫県を作ったのは薩摩藩出身の大久保利通の意向が反映されていた。「大久保は開港場を有する兵庫県が、県力の貧弱となるのは好ましくないとの意見であった」（同）

神戸港のある兵庫県は、こうして雄県としてスタートすることになったが、設立経緯からして今も県民意識が希薄であるのは否めない。一方で、隣接する旧国同士の感情のもつれ（差別や対抗意識）なども希薄であるとも言い得る。

では次にわたしのフィールドワークの地である奄美はどうだろうとの想いが立ち上がる。維新前の奄美群島は薩摩藩の支配下にあった。明治になったからといって突然大きな変化があったわけではない。あいかわらず「砂糖総買入れ制度」のもとで、黍作モノカルチャーを強いられ、薩摩藩・鹿児島県の税収奪がつづいていた。奄美もまた「なしくずしの維新」を迎えていた。薩摩藩武士が担っていた倒幕と新政府樹立の高揚感とは無縁の立場だった。むしろ明治になってから、奄美はあらたな過酷さが待ち受けていた。

奄美群島の沖永良部島

明治１５０年—兵庫県と奄美の問いかけ

そこで、わたしなりにこの１５０年を捉えたいと思い立ち、わたしがパーソナリティーとしてかかわる電波メディア（ＦＭわぃわぃ奄美専門チャンネル「南の風」）を活用して、「奄美にとって明治１５０年を問う」という連続シリーズを企画して、放送した。６人の異なる分野の人たちに語ってもらい、語った内容を文章化したものを、奄美の日刊紙である南海日日新聞に〈奄美にとっての明治１５０年〉というタイトルで連載することができた。もちろんすべての分野にわたって網羅できたわけではないが、１５０年という時代ブロックを俯瞰してみようとする批評的言説を少しばかりではあるが展開できたのではないかと思っている。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.138
神戸

2018年12月09日　通巻138号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等（「Mélange」同人）
maroad66454@gmail.com
定価 600 円(税別)